

4 . 石和温泉郷の観光地形成

ここでは、石和温泉郷の観光地形成に向けて必要となる施策の枠組みを、全体構想として明らかにする。

なお、全体構想の提案に先立って、石和温泉郷の観光地形成にとってその鍵となる、もしくはその重要な骨格をなすと考えられる、いくつかの個別計画について先行的にとりあげ、検討を試みた。全体構想の前段としてその検討結果を示す。

(1)個別計画の試み

1)さくら温泉通り街づくりの試み

. 検討趣旨

笛吹市の旧石和町内を東西に流れる近津用水は、兩岸に道路を有し、岸に沿って桜が植えられている。この兩岸の通り沿いには温泉旅館・ホテルが立地し、桜の並木にちなんで「さくら温泉通り」と呼ばれ、石和温泉郷の一つの重要な軸となっている。また、さくら温泉通り地区の旅館・ホテルの経営者を中心として組織され、各種イベントの開催やまちづくりの提言を行っている、「さくら温泉通り会」がある。この会は、平成15年旧石和町に「石和温泉『さくら温泉通り』の再開発」としてウッドデッキ設置と足湯公園整備を提案しており、その一つとして近津用水環境整備事業(ウッドデッキ設置)が実現することとなった。ウッドデッキは近津用水の左右を一巡する遊歩道を構成し、観光客を始めとする来訪者の回遊を促す仕掛けとなることが期待される。



近津用水沿いの桜並木

このような空間的にも特徴を有し、活発に活動しているコミュニティーが存在している地区は、石和温泉郷の再活性化において一つの核となることが期待される。

・ さくら温泉通りの沿革

近津用水について

往時から九か村用水と称し、笛吹川(明治40年8月の大水害までは現在の平等川の辺りを流れていた)を分水し灌漑用水として九か村(川中島・八田・市部・窪中島・四日市場・広瀬・小石和・唐柏・御坂町成田)で利用されていた。

明治34年に水利組合が組織されたが、明治40年8月の大水害の後、笛吹川の河川改修に伴って組合は廃止され、明治43年に石和町、富士見・甲運・玉諸・山城・住吉・白井川原の各村と一緒に近津水利組合を設立。昭和30年に近津用水土地改良区に改組された。また昭和51年、現在の2倍くらいの幅であった近津用水は、右岸をそのままにし、用水の半分を埋め立てて左岸側の道路を広くする工事が行われ、現在の川幅となった。現在は取水口から鳳山川・西川との合流地点までを近津用水と呼んでいる。

さくら温泉通りの概要

さくら温泉通りは旧石和町川中島地内、県道一宮山梨線～東文化橋までの約1kmの道路である。「さくら温泉通り」という名前がつく前は単に「温泉通り」と呼ばれていたが、約10年前、さくら温泉通りの一つ南側の通り(現在の湯けむり通り)も旅館・ホテルの建ち並ぶ温泉通りであったため、二つの通りを区別するために桜の木が立ち並ぶ温泉の通りということで、「さくら温泉通り」と呼ばれるようになった。

また、近津用水の両岸は道路のない単なる土手(リヤカーが一台通れる程度)であったが、昭和38、39年にかけて、当時のホテルオーナーが私財を投げ打って(当時の金額で60万円) 用水に沿った片岸4m・幅の民間の土地を購入し、道路を整備した。その後町によって下流側の道路が整備された。

この通りの特徴としては、道路の真ん中に近津用水という用水路が流れていること。また、その近津用水の両岸に沿って桜の木が植えられていることである。これは昭和40年代前半、当時のホテルオーナーがソメイヨシノの苗木150本をもらいうけ、近所の人々と一緒に植え、その後、昭和51年近津用水護岸整備の際に、今のように等間隔に植え替えられたものである。

さくら温泉通り会

昭和48年にさくら温泉通り会の前身となる温泉通り会がつくられ、桜の木の下で何かイベントをとということで、今までに民謡行進(踊り)や騎馬軍団の行進などのイベント、提灯の設置・維持管理を行ってきた。近年、さくら温泉通りの再開発に関する提案書を町に提出している。

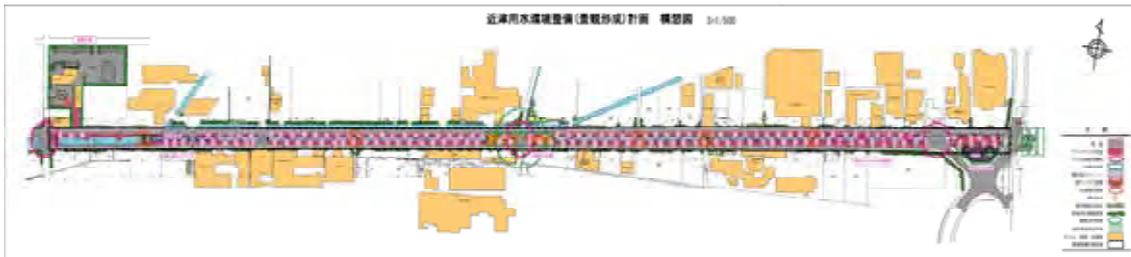
さくら温泉通り会と呼ばれるようになったのは通りの名前がさくら温泉通りに変わった頃である。また、年々会員を増やしていき、現在の会員数は17軒で、その構成は旅館・ホテルが16軒、飲食店が1軒となっている。

・ウッドデッキ事業

ウッドデッキ歩道を中核施設とする石和町の近津用水環境整備(景観形成)事業を中心に、事業化までの地元の働きかけや、事業が始まってからの行政と地元住民との協働、石和まちづくり委員会の設立なども含めた全体をここではウッドデッキ事業としている。

ウッドデッキイメージ図

近津用水環境整備(景観形成)計画 構想図



近津用水環境整備(景観形成)事業とそれに関する出来事の経過を示す。



2001.6 議会(旧石和町)から近津用水環境整備についての提言がなされる。

この提言を受けて、平成15年度(2004年度)

の事業として近津用水環境整備(景観形成)事業が実施されることになった。

2002.7 石和町観光協会により「石和温泉郷活性化案提言集」が作成される。

全20ページに亘り、石和温泉取引業者600社へのアンケートがまとめられている。アンケートは石和温泉郷活性化のための意見を自由に記述する形になっている。取引業者は、石和町内だけでなく山梨県内の他の市町村の業者、県外の業者で構成されている。

2003.3.18 さくら温泉通り会が「桜温泉通り会要望」を町へ提出。

景観形成、アクセス道路、農業と観光産業、観光振興とサイン計画などが要望の内容である。平成15年度の予算査定が終わった後であるので、近津用水環境整備事業を事業化するきっかけとなったものではないが、事業の実施に向けての検討材料の1つとなっている。

2003.7.23 さくら温泉通り会が「石和温泉『さくら温泉通り』の再開発に関する提案書」を町へ提出。町への提案内容は、さくら温泉通りの再開発や足湯の設置についてであるが、同時に、さくら温泉通り会が「自分たちで出来ることは自分たちでやる」ということも謳

ウッドデッキ構想配置図

っている。この提案書も先述の要望と同様に、事業実施に向けての検討材料の1つとなっている。

2003.7.28 石和町議会産業土木常任委員会協議会開催。

近津用水環境整備事業について、事業の実施に向けて、事業検討委員の構成などが協議された。

2003.10.30 第1回近津用水環境整備検討委員会開催。

委員は学識者・町議会・地元団体・行政(山梨県、石和町)・事務局(石和町建設課)で構成され、これに設計業務を受託した業者が加わる。近津用水環境整備(景観形成)の方針、維持管理について協議検討された。

2003.11.11 第1回近津用水環境整備懇話会開催。

議会・団体・有識者・農業関係者・住民・行政・事務局等で構成されている。第1回は委員会の設立会議として、委員会について、近津用水環境整備の基本方針、維持管理について地元から意見が自由に交わされた。

2003.11.26 第2回近津用水環境整備検討委員会・懇話会開催。

第2回の検討委員会・懇話会合同会議では、第1回の検討委員会・懇話会での議論のまとめについての説明や新たな意見交換がなされた。

2003.12.10 第3回近津用水環境整備検討委員会開催。

これまでの経過報告と近津用水環境整備方針・維持管理協定(案)・今後の予定についての協議検討が行われ、最後に検討結果の報告書が提出された。

2003.12.25 近津用水沿川の維持管理協定の締結。

近津用水環境整備事業終了後の近津用水沿道修景のための緑の保全、ウッドデッキ歩道・桜のライトアップ施設等についての維持管理協定について、町とさくら温泉通り会が協定を締結した。

2004.9.6 フットライト設置の維持管理協定の締結

近津用水環境整備事業実施後、ウッドデッキ歩道に町がフットライトを設置する。その維持管理(電気量・電球の取替え等の費用負担や苦情への対応)をさくら温泉通り会が行うことを協定として締結した。

・ さくら温泉通り会が予定している活動

同会が提案した再開発は施設等のハード整備を中心としたまちづくりの手段であるが、まちづくりに重要な役割を果たすソフト整備については、「自分達に出来ることは自分達でやろう」という意思表示を同時に行い、各旅館・ホテルのロビー・温泉の開放を行うことを予定している。

・現状の問題点と対策案

笛吹市の中での位置付け

2004年10月12日に石和町・御坂町・一宮町・八代町・境川村・春日居町が合併して笛吹市となり、行政単位で石和の名称がつくものがなくなってしまった。深沢七郎の小説の題名になった「笛吹川」の全国的な知名度は高いが、必ずしも笛吹川が石和と結びつくものではない。一方、「石和」は温泉の名称としては関東甲信越地方では良く知られており、全国的にも一定の知名度を有していると言える。新市として誕生した笛吹市が「笛吹」ブランドで地域を統一しようとする、一つの重要なブランドを自ら放棄することになる。

そこで、「石和温泉」ブランドを笛吹市の観光戦略ブランドと位置付け、石和温泉郷を観光発展の牽引役とすることが考えられる。この基本コンセプトの下で、さくら温泉通りの役割は次のようになる。

- ・「石和温泉」ブランドを体現する。
- ・笛吹市となった他の町村の観光資源の存在を全国に発信する。
- ・笛吹市内と隣接する地域の観光地をネットワーク化する。
- ・笛吹市における観光まちづくりのモデル地区となる。

温泉郷ディストリクト

石和地域の核となるJR駅は石和温泉駅という名称ながら、駅前でもっとも存在感を持っているのは郊外型ショッピングセンターで、駅からさくら温泉通りへの経路が推測できるような景観を示していない。しかも、さくら温泉通り沿いを除いて、温泉旅館・ホテルが相互に関係するような立地をしていとは言えず、それらの外観も共通性がないため、「石和温泉郷」という看板を地元は掲げているものの、空間的なまとまり(ディストリクト)として捉えることが極めて困難である。したがって、さくら温泉通りが石和温泉郷

の空間的主要軸と位置付けられるポテンシャルを有しているとしても、単なる桜並木としか捉えられないと考えられる。

そこで、温泉郷ディストリクトを明確にするために、その範囲をある程度明示的な境界線で規定し、ディストリクト内では個別要素のデザインや土地利用パターンに緩やかな共通性を与えることで、さくら温泉通りを温泉郷の軸として明確に位置付けられることが期待される。この地区の現状を踏まえると、具体的には次のような空間作りが好ましいと考えられる。

- ・ 歩いて楽しむ公園のような空間とする。
- ・ 公園の中に、宿泊施設、飲食店、体験工房などがあり、そこに集う地元の人々の中に観光客が参加する。

沿道空間利用

近津用水沿いの桜並木は桜の名所として知られており、桜の開花中は笛吹市の中でも特徴的な景観によって、散策を楽しむ来訪者を引き付ける魅力がある。しかしながら、桜の時期以外において観光客らの回遊行動を促すためには、ウッドデッキを設置した後も、空間的に見ると次のような問題を指摘できる。

- ・ 近津用水に並行する道路沿いのホテル・旅館は大型バスが侵入できる車寄せを道路に面して設置しているため、道路から建物の入り口までの空間が歩行者にとっては大きすぎる。
- ・ 同じ道路沿いの土地は農地であったり、駐車場であったり、街路としての連続性がない。



大型バスの車寄せ



沿道 通り沿いの農地

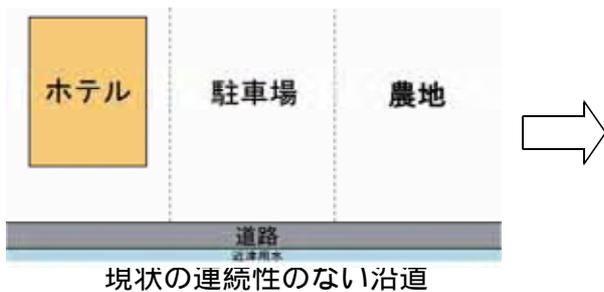
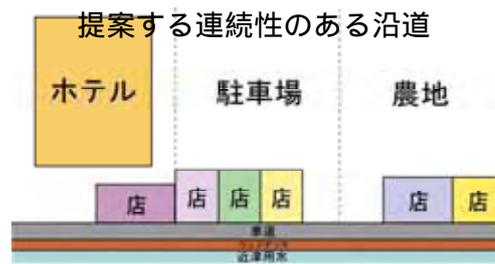


通り沿いの駐車場

に歩行者の視点から見た連続性がないことは、通りの賑わいを演出することを困難にし、回遊行動の動機付けに対してマイナス要因となっていると考えられる。このことについては次のような対策が考えられる。

a. 沿道の連続性創出

空き地、農地、駐車場、旅館・ホテル車寄せのうち、道路に沿った土地を小規模の店舗や工房とし、街路としてのモザイク的連続性を作り出す。店舗や工房を小規模とするのは、それぞれの間を移動する際に必ず通りに一旦



出るようにすることにより、賑わいを演出する重要な要素である歩行者が路上に姿を現すことと、時代の変化に対応して内容の新陳代謝が行われることを期待するためである。

b. 商業進出の機会提供

全国展開しているブランドの店舗は集客のノウハウを有していることが魅力であるが、地域に特徴を与えるためにはマイナスであり、また地域の活性化よりも短期的な収益性が最優先とされることから、突然の撤退ということもありえる。一方、自分の作品を公開する場や販売する場を求めているアーティスト・工芸家などは、個性や地域との関係を大切にすることが期待できると共に、彼らの仲間等呼び込むことも期待できるので、彼らに店舗や工房を安く貸してまちづくり活動の一員になってもらうことを考える。

c. イベント誘致



手焼せんべいの実演販売(岐阜県高山市)



空き店舗を利用した工房の直営店
(大分県臼杵市)

その名前にも表されているように、季節としては春の性格を有しており、桜の時期には観光客の来訪を期待できるが、それ以外の季節に再度訪れるきっかけとなるようなものがない。観光地としては通年で来訪者を確保したいので、季節ごとにエンターテインメント企画を招致したり、その興行内容が年間で変わるようなエンターテインメント企業を誘致して、季節的な来訪者数の変動を小さくすることを考える。

足湯公園の整備内容

足湯自体は既に全国各地で設置され珍しいものではなく、笛吹市においても春日居駅前に設置されて多くの足浴客を集めている。したがって、これからさくら温泉通り地区に設置される足湯は、単体では目新しさという点で魅力に欠けると考えられる。そこで、本地域のまちづくりのテーマの一つである「健康とまちづくり」に関連付けて、単に足浴をするだけでなく、健康増進とアミューズメント性を兼ね備えしかも安価に利用できる複合的施設を提案することが考えられる。

a. 徒歩湯

足湯の中で歩く徒歩湯を提案する。足浴で血行が良くなることに加えて、水中歩行により脚の筋力アップが図れるので、高齢者の体力維持、各種リハビリテーションの場とすることができる。



春日居駅前の足湯

源泉の認知度

昨年全国各地の温泉で温泉偽装が発覚し、観光客の温泉離れが進んだ一方で、源泉掛け流しの温泉は人気を博している。石和温泉は、首都圏から容易にアクセスできる平地に位置することで、かえって温泉が湧いているというイメージが不足している。しかも、かつては湯が噴出している様子を見ることができたものを、現在ではわざわざ覆ってしまい源泉の存在を隠してしまっている。そこで、温泉通りに源泉があることを広く認識してもらえる仕掛けが必要であり、具体的には次のようなことが考えられる。



青空温泉の頃の源泉

a. 源泉の観光資源化

源泉地に温泉情報センターのような施設を整備し、湧き出している湯を直接見ることができるようにして、その様子をインターネットで配信する。



源泉を覆い隠す管理事務所の建物

b. 源泉存在の広報

源泉の源泉地に整備する施設に、温泉が湧き出た当時の写真や情報を掲示するとともに、観光パンフレット等の様々な観光情報メディアに掲載するようにする。

笛吹市とその周辺の農産物



ナス・キュウリを始めとして多くの種類の野菜も生産されている。近年の食の安全に対する関心の高まりや健康志向、そして傾向として見られる観光客の泊食分離を考えると、笛吹市とその周辺で採れた野菜や果樹を食材とする飲食物を提供する場が温泉通りにあるということが、地域の魅力となると



中川花の会の朝市

考えられる。既に、旧石和町農家の女性の会(中川花の会)がさくら温泉通りの旅館・ホテルを巡回して農産物を販売している。このような活動を発展させると共に、さくら温泉通りのまちづくり活動が、ビジネスチャンスであると認識した農家等が、この地域に出店するようになるきっかけ作りとして次のような提案が出来る。



道の駅内で地元特産品の販売
(静岡県静岡市)



雰囲気のある飲食店(大分県臼杵市)

a. 地産物販店

温泉通りに沿った土地の所有者には農家も多いので、そのような土地の一部を提供してもらい、沿道の連続性を創出することもかねて、地産の野菜・果物を扱うパイロット店的な飲食店や販売所を設置する。

b. 笛吹市とその周辺の農家との連携

農家の立場から多産少品種となっている生産態様を、消費者ニーズに合わせて多品種少産とする。さらに、単に生産者が多品種を生産するのではなく、生産したものが確実に消費者に購入されるような独自の販売システムを構築する。

情報発信の工夫

最近では、宿泊の予約をインターネットで行うことや行政の情報をホームページに掲載することが一般的になってきている。さくら温泉通り会のメンバーのホテル・旅館も個別にホームページを開設しているが、地域としてまとまりを持った情報の発信は行われていない。また、笛吹市のホームページにも、さくら温泉通りの情報は掲載されていないのが現状である。地域の個々人が別々に情報を発信するだけでなく、それぞれの情報が他とリンクして広がりを持つようにすることが望まれる。また、一部の地域で行われている携帯電話の機能を利用した割引券や地域マネーの導入等、情報通信企業やメディア企業との連携も積極的に図っていくことも考えられる。

地域の他のまちづくり活動との連携およびネットワーク化

山梨県内には「まちづくり」や「地域活性」に直接的、間接的に関係する活動をしている団体や個人が多数存在する。このような地域の人的財産を結び付け、ネットワークを形成することにより、そこに参加する団体と個人の活動を発展させると共に、地域全体を活性化することが望まれる。

さくら温泉通り会の活性化

まちづくりにおいて、地域の住民が問題を自分のものとして捉えているかどうかは成功の決め手であり、さくら温泉通り会は、行政に全てを頼るのではなく「自分達に出来ることは自分達でやろう」という意識を持ち、まちづくりを自分たちの問題として捉えている。しかし実態としては、活動に参加しているのは一部の積極的なメンバーに限られている。多くのメンバーを巻き込むためには、まちづくりNPOやアドバイザーの参加を求め、ことや自身がまちづくりNPOに参加することも考えられる。

景観法の活用

2004年に施行された景観法により、やる気がある地方自治体が景観行政団体となり、景観計画を策定することができるようになった。また、景観法は規制を行うだけでなく、事業の支援を行えることから、地域住民の活動と連携して笛吹市が本法を活用して、域の一体的整備や個性の創出を行うことができると考えられる。現在さくら温泉通りの美観を損ねている電線と電柱も、通りを景観重要道路に指定することで、電線共同溝整備道路の指定を受けることが出来るようになる。

2) 女性のまちづくり参加

・活動趣旨・意義

女性の視点でのまちづくりの必要性

今までの自治会活動やまちづくりの中心は自営業者や引退をした勤労者、男性を中心とするメンバーであった。これからは定時制住民と言われる昼間は別の勤務地で働き、夜のみ帰宅する、休日にいる住民、女性たちも含めた全世代の住民が様々な形で地域の活動やまちづくりに参加する方向が求められてきている。

女性の視点でのまちづくりは生活を豊かにする方向を含んでいる。

また、旧石和町では男女共同参画社会において女性の自立を謳っていたことから、女性がまちづくりに積極的に参加していく必要があると言えるのではないだろうか。

観光スタイルの変化と農業へのまなざし

現代社会では高齢化、情報化、国際化が進んでいるということは言うまでもなく、多様な楽しみを多様な世代が持てるようなまちづくりが、レジャー志向と共に求められてきている。

また、観光のスタイルもこれまでは、慰安を目的とした団体旅行が主流であったが、今では目的も多様化し、旅行形態は団体よりも小グループ・個人旅行が増えてきている。

一方、人々の農業へのイメージや農業そのものの在り方も変わってきている。今までの農業イメージとは異なったあり方がまちづくりに貢献すると考えられる。

観光と朝市の意義

そのような中であって、都市の住民の自然志向、観光に自然を求める傾向は「食・農・やすらぎ」などにあらわされるような側面がある。また昨今、スローライフ・スローフードといった言葉もよく耳にする。

これからのまちづくりのキーワードとして「自然、産業、人」が挙げられる。これを笛吹市に当てはめると「自然:温泉、産業:農業+観光、人:女性の参画」となり、これら3つが一緒になったまちづくりをしていくことが大切であると考えられる。またこれからは、女性の活動がどうしたらまちづくりに寄与できるのかを考えていく必要がある。

・女性団体の活動と現状

中川花の会(朝市)

中川花の会は、石和町中川地区の農家の主婦12人による会であり、年齢は40～50代で中心となっているのは、50代中頃のメンバーである。活動内容は、自分たちが好きな花の種を蒔いて当番で水撒き等の世話をし、自宅に飾る花を作るという趣味の会である。活動年数は14年になる。

中川花の会の有志が朝市を始めたのは、石和町温泉旅館若女将の会が県外研修に伊香保温泉へ行ったとき、旅館の女将と農家の主婦が協働して朝市をしていたのを見た若女将の会の数人が、2年前、中川花の会に朝市の依頼をしたのがきっかけである。

軽トラック2台(2人/台)に自家製農産物を載せ、朝市活動に賛同してくれている旅館・ホテルの玄関先で毎週日曜の朝、各旅館・ホテルを1時間程度で移動販売している。旅館・ホテルを朝チェックアウトする宿泊客を販売の対象としており、観光客のニーズとしてはお土産に果物を買っていくということの方が多いため、7月～10月の果物のある時期だけ活動している。

販売品は、果実:ブドウ(巨峰・ピオーネ・ネオマス・ロザリオ・ピアンコ・甲斐路・甲斐乙女・ゴルビー・甲州・ベリーA)、プルーン、貴陽、桃、梨(幸水・豊水・新高・あたご)、松本柿、百目柿のづくし、桃のシロップ漬け、野菜:キュウリ、ナス、水菜、小松菜、ミョウガ、南蛮、トマト、ジャガイモ、サトイモ、京イモ、豆(モロッコ・インゲン・落花生)、オクラ、大根、ゴーヤ等である。低農薬であるため虫が食っていたり、虫がついていたりが、都会から来た観光客にとってはそれが安全で安心の証拠であるのか、普段は捨ててしまうような大根の葉っぱも大事に持って帰る人もいる。

リピーターを確保するために、農産物を入れる袋に生産者の情報を書いたり、石和で採れる農産物をお客さんに知らせたり、生産者でもある農家の主婦が販売を行うことで、観光地と農家の結びつきをアピールしている。

売れ残ったものをどうやって消化させるかが目下の課題であり、解決策として道の駅へ持って行く等が考えられるが、地元の旅館・ホテルで買い取ってもらえれば真の意味で観光地と農家の結びつきのアピールになり、また旅館・ホテルでは料理に地元の食材を使っているという地産地消のアピールにもなり得る。

なごみ会

毎週日曜日の午前中、なごみの湯の前にテントを張り、そこで朝市を行っている。お

風呂に入りに来る人がターゲットであるが、お風呂に入りに来る人はお金を持ってこないため、売れ行きはあまりよくない。朝市を目当てに来てくれるお客さんもいるが、朝市をやっていること自体、地元の人にはあまり知られていない。

販売品は、果実:桃、ブドウ(デラウェア・巨峰・ピオーネ・ピアンコ・甲州)、スモモ、梨、柿、野菜:ナス、キュウリ、トマト、白菜、大根、キャベツ、ブロッコリー、ネギ、ホウレン草、春菊、トウモロコシ、加工品:梅干、味噌、漬物、ジャム、ラッキョウ等であり、加工品も食品衛生責任者の資格をなごみ会のメンバーは全員取得している。味噌については、保健所の製造許可のある加工施設(みのり会加工工房)で生産しており、他の加工品も食品衛生法に抵触しない範囲(漬物を例にとってみると塩漬け、味噌漬け、粕漬けといったもの)で販売をしている。

味噌以外の加工品については、加工施設がないと、手の込んだものは作れなく、販売が出来ない。資格も持っていて、今までに学んできた知恵や技術は持っているのにそれを生かす場所がないということが今、最大の問題となっている。

活動を続けていくには、やはり家族の理解がないと出来ない。また、好きで興味のあることだから多少売れ行きが悪くても続けられる。売り上げがないのは困るが、お金を儲けることが全てではないし、そういった意味ではある程度のボランティア精神も必要である。

町全体で地域のものを売っていく(地産地消)ことが最初は目的であったが、始めのうちは同じ農家の主婦でも、そのような活動に対して快く思っていない人達もいたが、5年経過した今ではそのように考える人はいなくなってきたものの、なかなか地域全体に広がらず、参加してくれる人はいない。また、なごみ会でも現状の売れ行きであると参加をお願いするにもし難く、それ以前に今の人数で充分用が足りてしまうという状況である。

売れば、生産量を増やすことは可能である。販売品の中身も充実させていきたいが、資格・技術・材料はあるのにそれを加工する施設・器具、販売の場所がないということが一番の問題である。

また、同じような志を持って活動をしている人、またはしたいと思っている人を集めて組織化すれば、もっとまちづくりに女性の活動が貢献できるのではないかと。

みのり会

長い間、女性の自立や、社会貢献に関する活動に係ってきて、加工施設がほしいとい

うのが夢だった。これまでも20年以上手作り味噌や漬物を地域の人達と共にやってきたが、正式に許可を取った加工所がなかったため売ることができなかった。そこで、農協や町へ「加工施設を作って欲しい」と働きかけていたら、旧富士見農協で作ってくれることになった。富士見地区で女性がこれだけまとまって活動していたのは向田区だけであった。「場所については、昔使っていた向田区の共選所を利用して作って欲しい」とお願いしたところ、「向田区は笛吹川以東にあるため富士見地区では端のほうであり、農協で作るのだから他の区にも不公平が無いように作らなければならない」ということで、結局その話は白紙となってしまった。町議会にも「遊休農地を活用して大豆を作り、それを味噌に加工して旅館・ホテルで使ってもらったり、道の駅のような直売所が欲しい」という話もしたが、結局、解決されなかった。

「これでは今まで学んできたことを伝える時間がなくなってしまう」と思い、向田区の農家の主婦5人でみのり会を結成し、県の「旬のやまなし地産地消支援事業」から40%の補助金をもらい、残りは自己負担をし、平成15年、味噌の加工施設、「みのり会加工工房」を作ることとなった。おやきやジャム等の他の食品の加工施設も味噌と同じところに作りたかったが、味噌は麹を使用し、発酵させるため他の食品とは一緒に出来ないのも、断念せざるを得なかった。

みのり会加工工房では、11月～3月の間、無添加味噌の手作り体験会を随時受け付けている。また、みのり会で作った味噌は農協、なごみ会朝市で直売されている。

これまでに体験会に参加したのは、直売で買った味噌に貼ってあるラベルを見た人(リピーター)や、他町村の農協婦人部の人達で、参加者は年々増加の傾向にある。しかし、まだ大勢の人に知られるまでには至っておらず、例えば観光客が来るような所に販売場所や加工施設があれば、より多くの人に知ってもらうことが出来る。販路の拡大が今後の課題である。

また、インターネットでの販売等も考えているが、注文が多すぎても今の加工所では足りないし、将来的には味噌だけでなく、桃の瓶詰めやジャム、漬物といった他の加工品も一緒に送る「ふるさと宅急便」のようなものをやりたいと思っている。そうなるともっと設備の整った加工施設が必要で個人で行うには限界である。一緒に活動する仲間、ノウハウ、夢は持っていて先立つものがないというのが問題である。

石和町向田区朝市

山梨県貯蓄推進委員会で貯蓄実践地区に指定され、3年間、貯蓄やライフサイクルに関

する勉強をした。その時に、家計診断をした結果、農家の女性というのは自分の財産は生命保険と農協の口座くらいで、他には何も無いということがわかった。一生懸命働いているのに、自分のものが何も無いということを皆が痛切に感じた。そこで、「自分の老後に財産を残したい」という思いと、前々から思っていた、「形が綺麗でなかったり、サイズが規格に合わないといった理由で出荷することは出来ないが、充分美味しく食べられ、自宅で食べるにしては多すぎる余剰農産物を何とかできないか」という思いから、昭和62年に向田区の農家の主婦が主体となって朝市が始まった。現在、9人のメンバーで5月～9月の間、毎週土曜日の朝7時から12時まで向田区共選所にて活動している。

始めた頃はまだ朝市という形態が珍しく、遠くから来る人も沢山いたが、今では道の駅や直売所があちこちに出来たので遠くから来る人は少なく、地域の人が多い。

メンバーは皆、専業農家で金曜の午前中に出荷が終わると、午後から土曜日の朝市の準備をし、当日の朝、共選所へ持って行く。販売品は、果実：桃、ブドウ(デラウェア・巨峰・ピオーネ・ピアンコ・甲州)、スモモ(大石・ソルダム・太陽・貴陽)、梨、柿、野菜：ナス、キュウリ、トマト、白菜、大根、キャベツ、ブロッコリー、ネギ、ホウレン草、春菊、トウモロコシ、ジャガイモ、サツマイモ、サトイモ、白うり等であり、7時から1時間は人がいて販売するが、その後は12時まで無人販売という形をとっている。12時になったらメンバーが当番で片付ける。

後継者がいないので、近い将来、活動を継続していくことが困難になることが予想される。これは、非常に深刻な問題で、労働時間に見合った収入は期待できず、化粧や綺麗な服といった華やかさも無縁であり、また農業だけで食べていくのは厳しいというのが現実である。簡単に解決できる問題ではないが、今後、農業に夢を持てるような活動をしていきたい。

また、観光客による需要(観光農園で買い物をしていく等)があるのに、供給側の体制が整っていないというのが問題である。今後、もし観光客のいるところで朝市が出来るのであれば、合流して、向田区の朝市は発展的解消という形になることも可能である。そうすれば、観光客がリピーターとなり、宅配サービス等の新しいことも出来るようになるのではないかと考えている。

・提案と今後の課題

他のグループと連携をしたまちづくりの提案

- 観光客にもっと観光と農業の結びつきを意識させるために、さくら温泉通りに来るウッドデッキや温泉街を利用して、女性の活動を展開させたい。
- 観光客の求めるニーズについて調査し、女性の活動に活かしたい。
- 農と食との連携として、体に良い料理を考え、それを地元で採れる農産物を使って調理するということができるのではないか。
- 笛吹市の地域に伝わる郷土食を発信していきたい。そのために、郷土料理・食材等の調査をしたい。

ネットワーク化についての提案

- 今回は、石和を中心に女性の活動について見たが、これを笛吹市レベルに拡大し、また、これまでは農業や朝市が中心であった女性のグループをそれだけではなく、様々な分野に広げて、さらなる女性のグループの発掘をしたい。
- 相互の情報を交換し、互いを高めていく組織も必要である。情報だけでなく、個々の女性のグループが競い合うのではなく、互いに切磋琢磨し、実際に体を動かして活動していく中で、相互協力ができる組織を作っていくことが、これから女性がまちづくりに貢献していく上で重要である。

3)健康とまちづくり

・ 検討の趣旨

バブル崩壊後の社会情勢の変化に伴ってレジャーやレクリエーションの形態に大きな変化が生じ、観光旅行は団体・歓楽型から家族・個人型へ、それと同時に物見遊山的なものから癒しや安らぎを求めるものへと移行しつつある。温泉を主要な観光資源としてきた石和温泉郷を訪れる観光客にも同様の変化が生じており、これまでとは異なった対応が求められている。

また、少子高齢化が進展する中で、人々は健康に大きな関心を寄せるようになってきている。多くの自治体にとって住民の高齢化に伴う医療費や介護費の増大は懸念するところであり、「健康日本21」に代表されるような様々な健康対策が取られている。温泉に対しても単なる入浴や傷病後の療養に利用するだけでなく、健康づくりや癒しへの活用が期待されるようになってきている。

ここでは、石和温泉郷を健康づくりに活用することを念頭に置き、石和の旅館・ホテルと医療関係者等の連携とまちづくりについて検討することを目的とし、具体的には、石和温泉において「温泉利用プログラム型健康増進施設（平成15年に厚生労働省が制度化）」が認可された場合の保養プログラムについて検討した。

・ 健康増進プログラム

石和温泉旅館協同組合に加盟する18施設は、平成16年に「特に優れた周辺の自然環境と組み合わせた健康増進プログラム」を作成し、温泉利用プログラム型健康増進施設認定の申請を行った。また、これに先立って関係者29名が入浴指導員の認定を受けている。

健康増進プログラムは、「自然環境」、「温泉」、「食事」、「医療」の4要素を組み込んだ滞在型宿泊プログラムで、各要素の内容は以下のようになっている。

- 「自然環境」・・・森林浴などの周辺の自然を利用した適度な運動プログラム
- 「温泉」・・・健康増進施設の認定を受けた旅館の温泉への入浴
- 「食事」・・・地元栄養士による献立を旅館が提供
- 「医療」・・・「温泉利用診断書」を渡す

以下に、3泊4日で温泉利用プログラム型健康増進施設を利用する場合のプログラム例を示す。下表における「保養プログラム」は森林浴などの周辺の自然を利用した適度な運動プログラムを表している。

温泉利用プログラム例

月日	時間	活動内容
月日 (1日目)	12:00	検査施設着・昼食
	13:00	採血等健康診断・アンケート記入
	14:00	プログラム説明
	14:30	保養プログラム(1)
	16:00	宿泊(入浴)施設へ移動・入浴プログラムの説明・実施
	18:00	夕食(翌日の行程説明)
月日 (2日目)	8:00	朝食(朝食前後に各自血圧測定)
	9:30	保養プログラム(2)
	15:00	宿泊(入浴)施設へ移動
	16:00	入浴プログラムに従い各自入浴
	18:00	夕食(翌日の行程説明)
	20:00	安眠のための自立訓練法(～21:00) 自由参加
月日 (3日目)	8:00	朝食(朝食前後に各自血圧測定)
	9:30	保養プログラム(3)
	15:00	入浴施設へ移動
	16:00	入浴プログラムに従い各自入浴
	18:00	宿泊施設に戻って夕食
	20:00	足裏療法(～21:00) 自由参加
月日 (4日目)	8:00	朝食(朝食前後に各自血圧測定)
	9:30	保養プログラム(4)
		解散

・モデルコースの踏査

保養プログラムとして、90分あるいは半日程度の周辺の自然を利用した散策を想定し、モデルコースの踏査を行った。モデルコースの設定に当たっては、自然、風景、歴史等のコース毎のテーマを考慮する必要があるが、今回は季節に左右されないことを条件に、大蔵経寺山周辺、市部通り周辺、さくら温泉どおり・湯けむり通り周辺を選定し、現場踏査を行った。



大蔵経寺山周辺

大蔵経寺山は石和町の北に位置し、山梨百名山に選ばれている標高 716m の山である。ふもとには大蔵経寺と物部神社があり、大蔵経寺は行基が開創と伝えられており、国の重要文化財に指定された絹本着色涅槃図を所有する。大蔵経寺山の中腹には、古墳群や「お天狗さん」と呼ばれる山神宮がある。山神宮祭は 2 月 21 日に行われ、甲府盆地に春を告げる祭りとなっている。山神宮祭で売られる最初のお札は金札と呼ばれ、金札を求めて人々は我先にと参道を駆け上がるそうである。

国道 144 号の大蔵経寺入口の道には駐車場があり、参道を進むと大蔵経寺山の案内板がある。大蔵経寺の山門越しに見える落石防護壁の上までは工事車両用の道路があり自動車で行くことができる。中腹には古墳群があるが、案内板がないので知らない人には古墳群とは気づきにくい。落石防護壁上からは甲府盆地全体と富士山を見ることができる。

山神宮には国道 144 号の山神宮入口からも、大蔵経寺山中腹からも行くことができる。山神宮入口に入って閑静な住宅街を抜けると山神宮下社に着く。そこから葡萄やスモモの果樹園の中を通り、鳥居を抜けると約 160 段の階段がありその先が山神宮上社となる。山神宮上社の上には落石防護壁方向へ行く道と大蔵経寺山山頂へ行く道が続いている。

このコースは、高低差があり身体的負荷が大きい、眺めがよい、季節を感じられる等の特徴を持っている。なお、コース上に案内図は大蔵経寺入口と大蔵経寺山中腹の 2 箇所、トイレは大蔵経寺の境内の 1 箇所、休憩所はない。

以下にコースの写真を示す。



大蔵経寺入口案内板

大蔵経寺山門と落石防護壁

大蔵経寺山中腹案内板

古墳群

落石防護壁上からの眺望

大蔵経寺山登山道

山神宮入口

山神宮入口から山神宮へ

山神宮下社

下社から上社への道

山神宮鳥居

山神宮参道の階段

山神宮上社

天狗神社から大蔵経寺山山頂へ

市部通り周辺

市部通りは旧甲州街道石和宿であり、沿道には石和本陣跡や石和八幡神社、遠妙寺などの寺社、小林公園(足湯、民族資料館)、さらに市部通りの北側にはモンデ酒造、八田



御朱印公園、遠妙寺、石和八幡宮、佛陀禅寺などの観光ポイントがある。しかし、石和本陣跡は看板しかない、民族資料館は閉館されている等、観光ポイントとしての魅力を十分に備えた箇所は少ない。また、現在歩道整備中の市部通りと駅前通り以外にはほとんど歩道が確保されていない。市部通りから路地に入り込むと現地とガイドマップの対応が理解しにくい場所が多かったが、明確な案内板等は設置されていない。休憩所やトイレは沿道の八田御朱印公園や小林公園、飲食店等を利用できる。

コースは、平坦で各観光ポイント間の距離は1km以下であるので、短時間で観光ポイントをめぐる散策コースの設定が可能である。また、これらの観光ポイントをつなぐ経路は一般住宅街を通る場合も考えられるが、大勢の観光客が住宅街を通過することの住民への影響も考慮してコースを設定する必要がある。

以下にコースの写真を示す。

モンデ酒造

モンデ酒造から八田御朱印公園へ(1)

モンデ酒造から八田御朱印公園へ(2)

モンデ酒造から八田御朱印公園へ(3)

八田御朱印公園

八田御朱印公園から遠妙寺へ(1)

八田御朱印公園から遠妙寺へ(2)

八田御朱印公園から遠妙寺へ(3)



遠妙寺(普賢願生稻荷神社)

石和本陣跡

足湯(小林公園)

民族資料館(小林公園)

石和八幡宮

佛陀禅寺

佛陀禅寺(吃安の墓)

駅前通り

さくら温泉通り+湯けむり通り(周辺)

さくら温泉通りは、現在、歩道用ウッドデッキの整備が進められているが、さくら温泉通りと湯けむり通りの連絡路や湯けむり通りには歩道が確保されていない。また、レンタサイクル遊湯(無料貸し自転車)事業が行われているが、自転車道も確保されていない。通りに面して空地や資材置き場、旅館・ホテルの背面、夜間営業の飲食店が建ち並ぶところがあり、景観的に好ましいものではない。トイレや休憩所は、沿道の旅館・ホテルが既にロビー開放を行っているので、それらを利用することができる。

さくら温泉通り、湯けむり通りともに平坦で延長距離は1km程度である。保養プログラムとしては、巡回コースや市部通りへ延長したコースを設定することにより、必要な時間(距離)が確保できる。

以下にコースの写真を示す。



さくら温泉通りゲート

さくら温泉通り

さくら温泉通りと湯けむり通りの連絡路(1)

さくら温泉通りと湯けむり通りの連絡路(2)

湯けむり通り(1)

湯けむり通り(2)

レンタサイクル遊湯

レンタサイクル遊湯の案内看板

．モデルコースの選定

90分および半日の散策コースは、時速4 km/hの標準的な歩行速度で指定された時間内で散策できるように経路を設定した。

大蔵経寺コース

経路上の主要地点間の時間(距離)は以下のものである。

- ・ 山神宮入口(A) 山神宮上社(B) 25分
- ・ 山神宮上社(B) 案内看板(E) 10分
- ・ 案内看板(E) 落石防止壁(D) 30分
- ・ 案内看板(E) 大蔵経寺(F) 35分

- ・ 大蔵経寺(F) 大蔵経寺入口駐車場(G) 10分
- ・ 山神宮上社(B) 大蔵経寺山頂(C) 60分

これらを基に、山神宮入口あるいは大蔵経寺入口駐車場を起点、終点とする90分コースと半日コースを設定した。

90分コース

イ 山神宮入口 山神宮上社 案内看板 大蔵経寺 大蔵経寺入口駐車場

ロ イの逆回り

半日コース

イ 山神宮入口 山神宮上社 大蔵経寺山頂 山神宮上社 案内看板 大蔵経寺
大蔵経寺入口駐車場

ロ 山神宮入口 山神宮上社 案内看板 落石防止壁 案内看板 大蔵経寺 大
蔵経寺入口駐車場

ハ イの逆回り

ニ ロの逆回り

以下の地図に実線でこれらのコースを示す。

市部通り・さくら温泉通り・湯けむり通りコース

経路上の主要地点間の時間(距離)は以下のようである。

- ・ 駅前通り(A) 市部通り駅前交差点(B) 5分
- ・ 駅前通り(A) 石岡橋(F) 10分
- ・ 石岡橋(F) 八田御朱印公園(D) 5分
- ・ 八田御朱印公園(D) 遠妙寺(C) 15分
- ・ 遠妙寺(C) 市部通り駅前交差点(B) 10分
- ・ 石岡橋(F) さくら温泉通りゲート(G) 15分
- ・ モンデ酒造(E) 八田御朱印公園(D) 10分

ここでは長い散策距離が確保できないため、市部通り・さくら温泉通り・湯けむり通り一体を対象として、宿泊施設を起点・終点とする周回型の90分コースを基本コースとして設定した。さらに、鉄道利用客を石和温泉駅からさくら温泉通りあるいは湯けむり通りへ誘導するとともに散策コースに変化を持たせるために、基本コースに接続する2つの追加コースを設定した。

90分コース

イ さくら温泉通りゲート（さくら温泉通り）石岡橋 駅前通り 市部通り駅前交差点 遠妙寺 八田御朱印公園（湯けむり温泉通り） さくら温泉通りゲート

ロ イの逆回り

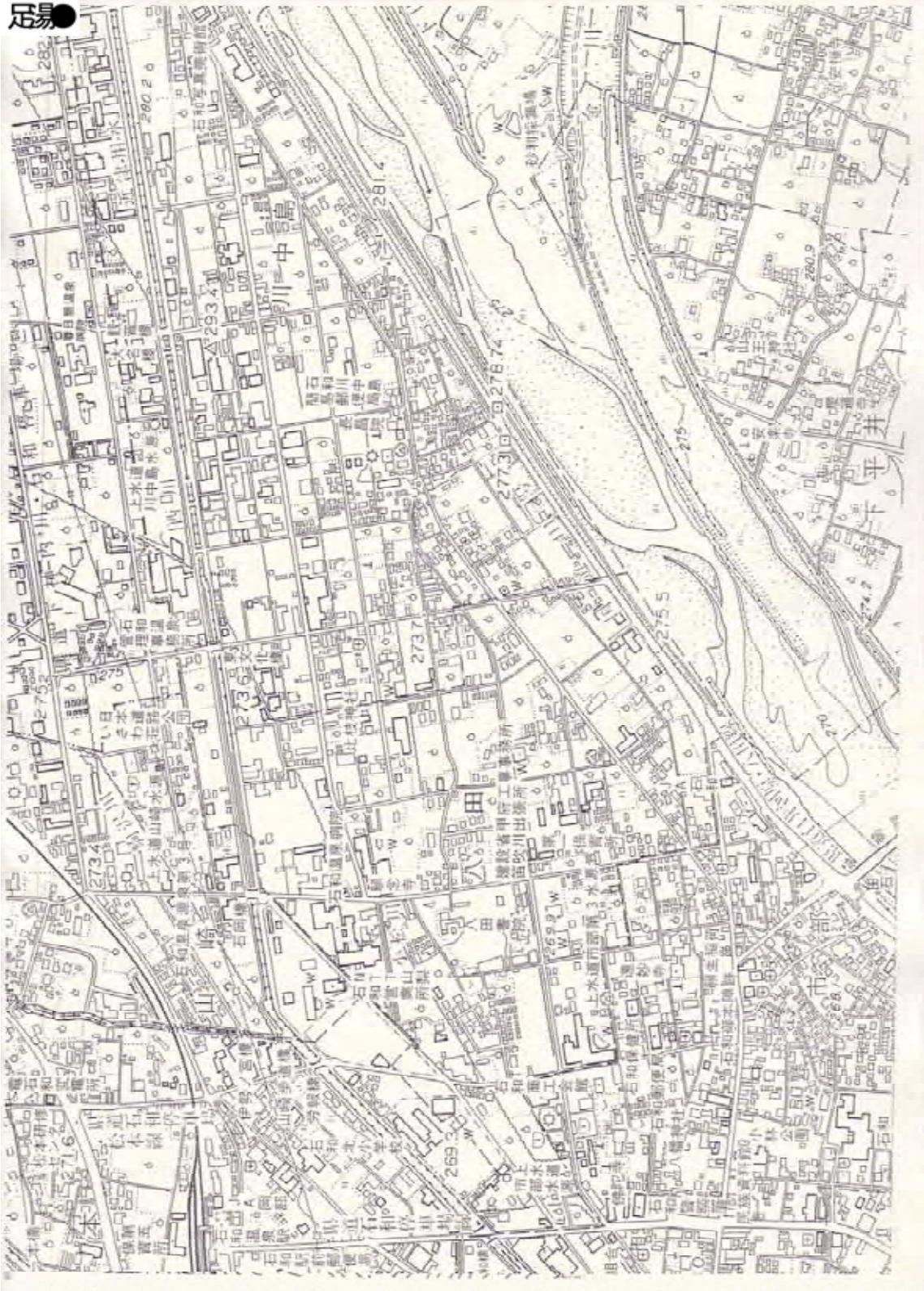
追加コース

イ 石和温泉駅（彩甲斐橋通り）（湯元通り）足湯

ロ 観音橋（さくら温泉通り）（観音通り） 笛吹権三郎の碑 権三郎通り 八田御朱印公園

以下の地図に、基本コースを実線で、追加コースを鎖線で表す。

足湯 ●



市部 **イ** 源泉 通 石和温泉発祥の碑 り、さく 足湯コース
 ら温泉通り・湯けむり通 り散策コ 追加コース

・ 提案および将来展望

保養プログラム実施における提案

本報告で選定した、大蔵経寺山周辺、市部通り・さくら温泉通り・湯けむり通り周辺を対象とした散策コースを利用した保養プログラムを実施するにあたって、より効果的な運用を図るために以下を提案する。

aこれらの散策コースを記入したマップを作成する。マップは、デフォルメされた地図よりも、実際の地図にコースだけでなく距離、高低差、トイレ、休憩所、見所などが書き込まれたものがよい。

b大蔵経寺山コースについては、見所が展望台しかない、トイレが大蔵経寺にしかない等の問題点が明らかになった。今後は、古墳群を資源として整備をすることにより新たな見所の確保、トイレ、休憩所(ベンチ・東屋・山小屋)、サイン(道標・案内板)の整備も含めた登山道を整備する。さらに、整備後の大蔵経寺山コースを維持管理していくために、地元の人々が中心となったファンクラブ的な組織を立ち上げる。

c市部通り、さくら温泉通り・湯けむり通りコースについては、寺社や公園等を観光資源として整備するとともに、散策コースとしての案内(サイン)、景観および歩道を早急に整備する。特に、このコース沿いには石和温泉発祥の碑や源泉等の石和温泉を象徴する重要なポイントがあるので、これらも観光資源として整備する。

d市部通り、さくら温泉通り・湯けむり通りコースに接続する2つの追加コースについても整備する。石和温泉駅からさくら温泉通りおよび湯けむり通りへの誘導路は、駅からの来訪者に対する石和温泉の第一印象を左右することに配慮する必要がある。観音橋から八田御朱印公園への追加ルートは通りに沿った水路と昔の面影を残す景観が観光ポイントである。これらは癒しを求める観光客の吸引力となることから、水路や景観の保全あるいは復活に取り組む。

石和温泉再生に向けて

現在、石和温泉の8施設が日本で最初の温泉利用プログラム型健康増進施設としての認

定を厚生労働省に申請中である。これは、これからの石和のまちづくりと石和温泉再生の方向性を示唆していると捉えることができよう。すなわち、「健康」をテーマとした石和のまちづくりが石和温泉を再生させるということである。人々の健康は、医療による病気や怪我の治療だけでなく、日常の食事や運動などの生活習慣や周囲の環境が整うことにより維持することができる。地域住民が健康に暮らせる街でなければ「健康」を求める観光客は訪れないであろう。

石和温泉の特徴として、近隣でリハビリテーション病院・施設協議会に加入している病院が7ヶ所(石和温泉病院、石和共立病院、一宮温泉病院、春日居リハビリテーション病院、富士温泉病院、山梨温泉病院)ある、新宿から乗り換えなしの特急電車で約1時間、自動車でも高速道路を利用すれば首都圏から約2時間で到着することができる、石和温泉郷の位置する笛吹市は農業が盛んであり、自然環境に優れている、甲府盆地のほぼ中央にあり、温泉街は平坦であるが、わずかの時間で高低差の大きい山々にも行くことができる、等が挙げられる。

これらの特徴を活かして、地域住民と健康増進施設利用者の健康増進のための取り組みを展開することができれば、他にはできない石和温泉独自の特徴を確立することができるのではないだろうか。

これらを踏まえて、「健康」をテーマとした石和のまちづくりという観点から、石和温泉再生のための提案を行う。

a)リハビリテーション病院・施設と旅館・ホテルの連携

温泉利用プログラム型健康増進施設を活用するうえでリハビリテーション病院・施設との連携は大前提であるが、その他にも以下のような連携が考えられる。

リハビリテーション病院・施設は地元住民だけでなく、周辺市町村や近県からも利用されている。近県からの利用者のなかには旅館・ホテルに滞在してリハビリテーション病院・施設に通う人もいることから、旅館・ホテルはこれらの人々に対応した宿泊サービスを提供し、これらの人々も宿泊客として取り込む。

温泉療養として温泉利用型健康増進施設を1ヶ月に7日以上利用した場合、施設利用費と往復交通費が所得税医療費控除の対象となる。このことを旅館・ホテルに宿泊する健康増進施設利用者に周知するとともに医療費控除のための手続きを容易にして健康増進施設利用者の便宜を図る。これにより、健康増進施設利用者の滞在長期化および再訪の確保、さらには遠方からの利用も期待できる。

旅館・ホテル宿泊型人間ドックを実施する。病院宿泊型の人間ドックは通常行われているが、宿泊場所を旅館・ホテルとすることにより、くつろぎながら人間ドックを受診することができ、夫婦や親子といった複数での受診も期待できる。さらに、人間ドック利用者をそのまま健康増進施設利用者として取り込んでいくことも可能であろう。

b温泉利用プログラム実施のための運営組織の設立

病院や行政、健康増進施設が連携して温泉利用プログラム実施のための運営組織を設立し、健康増進施設利用者だけでなく地域住民の健康確保にも利用できる温泉利用プログラムを作成・実施する。

温泉利用プログラムとしては、個人での実施だけでなく、散策コースをガイドが説明しながらグループで散策するガイドウォーキングなども実施する必要がある。また、散策以外のプログラムも対象にしたメニューの充実や見直し、利用者の健康データ管理や健康相談等を行うことにより、健康増進施設の継続的な利用者を確保できるものと考えられる。なお、温泉利用プログラムの充実や見直しはソフト面だけでなく歩道や観光資源の整備等のハード面からも検討する必要がある。

c散策コースの充実と整備

散策コースの対象地域を笛吹市全域に拡大し、歩く人の体力や見学場所(見学目的)、季節を考えた様々なコースを設定し、整備する。散策コースの整備は歩道の確保だけでなく、沿道の観光ポイントやトイレ、休憩所、バリアフリー、景観、案内等についても配慮する必要がある。なお、散策コースの景観に関しては、沿道住民の理解と協力が不可欠であることから、住民と行政が連携した整備が望まれる。

保養プログラムでは90分あるいは半日を散策時間としているが、これとは別に1日あるいは2日以上コースも設定する。これにより、健康増進施設利用者以外の長期滞在者の誘致やウォーキング大会等のイベントの開催も可能になる。

具体的には、以下のようなコースが考えられる。 古代遺跡巡りコース:笛吹市内には日本に誇る数多くの遺跡がある。これを活用することにより、市内の県立博物館も含めた古代遺跡散策コースが設定でき、これまでとは異なった石和温泉の魅力と来訪者の発掘につながるものと考えられる。 山梨百名山コース;山梨百名山のうちの8つ(大蔵経寺山、兜山、達沢山、春日山、滝戸山、大栃山、黒岳、釈迦ヶ岳)が笛吹市内に位置する。本報告で設定した大蔵経寺山コースについては兜山(春日居町、山梨百名山の一つ)も含めたコースも設定するなど、これらの山々を訪れるコースを設定することで登山客等の

新たな来訪者が期待できる。

d食や農業との連携

地域独自の農産物や食品、料理を見直して地産地消が可能なシステムを構築し、健康増進施設で提供する料理に活用する。これにより、地域に根ざした食文化形成に結びついていくものと考えられる。

農業については、これまでの観光農園といったあり方だけでなく、農園貸し出しや農業体験の場を提供し、旅館・ホテルに宿泊して農作業を行うことも考えられる。農園貸し出しの対象者は中高年となることが予想されるが、農業体験については青少年を対象に学校単位での利用も可能である。これらは、年間契約等を行うことにより確実にピーク確保に結びつくとともに、農業振興にも役立つものと考えられる。

e環境問題への取り組み

石和温泉の実態調査結果において、河川のゴミが汚いという意見がいくつか寄せられている。石和温泉には笛吹川や近津用水を始めと多くの水路があり、これらは本来ならば癒しとなるべき空間である。

そこで、河川のゴミだけでなく、源泉保護の点からも環境問題に積極的に取り組み、その情報を公開して石和温泉のイメージアップを図る。例えば、長期滞在者については希望がなければタオルを取り替えないといったサービスのあり方も検討していく必要があるだろう。

4 笛吹市の玄関口の整備

-4 に示したように、今回実施したアンケート調査の結果によれば、石和温泉への来訪観光客の利用交通手段は、自家用車・レンタカーが 52.2 % と過半数を占め、鉄道が 30.6 % でこれに次いで多い。これに次ぐのが高速バス利用であるが、4.8 % にとどまっている。これにより、石和温泉郷～笛吹市の玄関口は、石和温泉駅および一宮・御坂インターチェンジなどであることが明らかである。

今後、進展すると見られる高齢化や手軽な旅行の志向の高まりなどを考えると、特に鉄道利用の場合の主要な玄関口となる石和温泉駅のあり方が課題となる。

交通結節点として求められる公共輸送機関であるバス路線との接続がほとんどなく、タクシーに頼っているのが実情であるが、このタクシーの評判も必ずしも芳しくはない。また、石和温泉郷～笛吹市の玄関口にふさわしい雰囲気や装いが見られず、錯綜して、駅前広場としての機能上からも好ましい状態とはいえない。案内施設があるが、観光客から寄せられる不満も多く、運用上、まだまだ工夫の余地がある。

これには、石和温泉郷の場合、宿の車が駅まで出迎えるスタイルが一般的で、観光客が駅周辺を歩くことがほとんどないことも手伝っているものと思われる。現在、駅南部で土地区画整理事業が進行中であることも玄関口としての印象を悪くしている。

このため、まず、交通結節点としての基本的な機能であるバス等の公共輸送機関との接続をスムーズにすることが重要であり、また現在錯綜を極めている、車、タクシー、自転車、歩行者などの動線の整理も求められる。加えて、今後増加すると見られる「歩く観光（自転車利用も含む）への対応も重要である。

こうした駅あるいは駅前広場としての基本的な機能の仕上げとして、駅周辺を含むトータルデザインが必要となる。

規模や装飾がいたずらに目立つ駅をめざすのではなく、温泉、歴史、自然などの面での個性がそこそこに光る、必然性が充分に感じられるデザインの駅でありたい。

また、施設面やデザイン面と同時に、場合によってはそれ以上に、駅頭に降り立った観光客に、すぐさまもてなしの心が伝わるような接遇の姿勢が重要である。

自動車利用の場合の玄関口である一宮・御坂インターチェンジ周辺についても、石和温泉駅の場合に準じた交通拠点としての機能の確保に加え、「歩く観光（自転車利用も含む）への対応や観光情報の提供が重要である。